



ショートコメント

★★★

Data 2025-72

木の上の軍隊

2025 年／日本映画

配給：ハピネットファントム・スタジオ／128 分

2025（令和 7）年 8 月 11 日鑑賞

テアトル梅田

監督・脚本：平一紘

原作：株式会社こまつぎ・原
案井上ひさし『木の上
の軍隊』

出演：堤真一／山田裕貴／津
波竜斗／玉代勢圭司
／尚玄／岸本尚泰／
城間やよい／川田広
樹／山西惇

みどころ

井上ひさし原案の舞台を映画化！そう聞けば、「これぞ日本映画の良心！」
と言うべき『父と暮らせば』（04 年）と同じく必見！

1945 年 5 月に沖縄戦が始まるとすぐに「木の上の軍隊」になってしまった
山下少尉と島の新兵・安慶名の共同生活は如何に？

テーマは良し！だが、あの時代、沖縄の伊江島でホントに飛行場が建設され
ていたの？また、飛行場建設のための大量の爆弾がホントにあったの？私に
は、本作の時代考証にかなりの違和感が！

本作では御年 61 歳の堤真一が陸軍少尉役を、また若手俳優山田裕貴がきつ
と 10 代だろうと思われる島民の新兵役を！これは戦後 80 年間平和が続き、少
子高齢化が進んだ結果だが、これはいくらなんでも違和感がいっぱい！ちなみ
に『あゝひめゆりの塔』（68 年）で吉永小百合が主演したのは 24 歳の頃だ。

私は近時のアホバカバラエティのエンタメ色にはうんざりしているが、本作
中盤の「木の上の軍隊」の共同生活（掛け合い？）はまさにバラエティそのも
の。こうしなければ戦争映画（反戦映画）に若者を呼べないとの配慮だろうが、
そんな迎合スタンスはナンセンス！終戦記念日には、またお盆には骨太の戦争
映画を！そんな意欲を持つのなら、それを徹底させなければ！

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— *

◆8/15 の終戦記念日を中心としたお盆休みには、必ず戦争映画を 1 本！そんな習慣に従
って、今年は本作を鑑賞！太平洋戦争末期、地上戦が行われた沖縄の伊江島で、敗戦を知
らないまま 2 年間も木の上で生き延びた 2 人の日本兵の姿を描く映画。そして井上ひさし
原案の舞台を映画化したものと聞けば、それだけで必見！だって原爆の悲劇を描いた井上
ひさし原作・戯曲を映画化した『父と暮らせば』（04 年）（『シネマ 4』288 頁）は、涙なし
には観られない、「これぞ日本映画の良心！」というべき感動作だったのだから。

◆本作の主人公は、宮崎出身の山下一雄少尉（堤真一）と伊江島で生まれ育った新兵・安慶名セイジュン（山田裕貴）の2人だ。冒頭、山下らの指揮の下に、島民たちが必死になって幅50m、長さ1,500mの滑走路を作る姿が登場する。そこでは、「伊江島を不沈空母とし、本土からの航空支援部隊の到着を待つ」と言われていたが、それって本当？

私は去る7/14、鶉野（うずらの）飛行場跡戦跡を見学する旅に出かけ、実物大の紫電改と九七艦上爆撃機などを見分するとともに、幅45m、長さ1,200mの鶉野飛行場を人力だけで完成させたという現実の姿を見てきた。そんな目で本作導入部の伊江島における幅50m、長さ1,500mの飛行場建設風景を見れば、アレレ、アレレと思わざるを得ない。そもそも、飛行場建設のためとはいえ、あの当時の日本の国力からしてあんなに大量の弾薬を使える筈はないし、応援が来ないことが分かったと、さらに大量の弾薬を使って建設した飛行場を壊しにかかるなど、あまりにも史実を無視しているのでは？少なくとも、私は沖縄決戦に向けて、伊江島に新たな飛行場が建設されていたなどという話を聞いたことがないが・・・。

◆戦後80年間も平和が続いた2025年の日本では少子高齢化が進んでいる。しかし、1945年5月の時点の敗色濃い日本では、戦争初期に華々しい戦果をあげた軍人はほとんど死亡し、『永遠の0』（13年）（『シネマ31』132頁）を観るまでもなく、パイロットたちはまともな訓練も経ていない若者ばかりだった。それは海軍だけでなく陸軍も同じだから、まず冒頭に見る山下少尉の老け顔にあぜん！

堤真一は61歳だが、あの当時の陸軍少尉といえはせいぜい25歳前後までだから、あんなふけ顔の陸軍少尉がいるはずはない。また、山田裕貴は現在34歳だから日本の俳優としてはまだまだ若手だが、本作の安慶名はまだ20歳にもなっていない設定のはずだ。島から出たことのない境遇とか、それだからこそ彼の体に染み付いた価値観や考え方は、安慶名が10代だという前提だから納得できるものだ。北大路欣也を竜馬役に起用した1968年のNHK大河ドラマ『竜馬がゆく』は、原作者の司馬遼太郎から、「ぼくが竜馬を書いたのは、生き生きとした青春を竜馬に感じたからなんです。とにかく竜馬は男も女もほれる男ですよ。その点あなたはどことなく竜馬に似ているし成功まちがいなしだ」と言われたそうだからすごい。他方、2004年の正月1/2にテレビ東京の新春ワイド時代枠で放映された市川染五郎を龍馬役に起用した『竜馬がゆく【ドラマ】』も面白かった。同作は2025年1/11からBS12で再放送されているため、毎回録画して鑑賞しているが、市川染五郎が演じる竜馬が1863年に土佐から江戸に旅立ったのは19歳の時だ。また、吉永小百合が『あゝ、ひめゆりの塔』（68年）（『シネマ57』209頁）に主演したのは、彼女が23歳の時、共演した和泉雅子は21～22歳の時だから、とにかく若かった。そして、それが映画の中のひめゆり部隊として登場する沖縄師範学校女子部の生徒たちの若さにぴったりマッチしていた。

しかるに、少子高齢化が進んだ2025年に作られたとはいえ、本作における1945年の沖縄の伊江島における2人の日本兵の年齢の不相当ぶりはあまりにあまりだ。こんな映画の安慶名役は少なくとも10代の若者が、また陸軍少尉役の山下もネームバリューで選ぶのではなく、どこかで20代の若手俳優を発見して抜擢しなければ・・・。

◆本作のテーマは、タイトル通り「木の上の軍隊」。そこで山下がなぜ“軍隊”という言葉にこだわったのか、そして本作のタイトルもなぜ「木の上の軍隊」とされたのかは、本作のキモだから十分考える必要がある。彼らは、軍服を着て銃と弾薬を持っているだけで、到底軍隊と言える代物ではないが、山下が軍隊に固執したのは、彼が軍国日本の軍人思想に凝り固まった男だからだ。しかし安慶名はそれとは全然違うから、そんな2人だけの木の上での共同生活が、安慶名に辛かったのは当然だ。

本作中盤は、全くタイプの異なるそんな2人の男の奇妙な共同生活を描くものになる。ダニエル・デフォー原作の『ロビンソン・クルーソー』(1719年)は、難破した船から1人だけ島に流れ着いたロビンソン・クルーソーの、たった1人だけの生活を興味深く描いたが、本作も



山下と安慶名の2年余の「木の上の軍隊」としての共同生活を興味深く描いていくので、それに注目！もっとも、“興味深く”とは言っても、近時のアホバカバラエティでは、とにかく「わかりやすく、下ネタも含んでおもしろおかしく、エンタメ調に」が至上命令とされているため、「製作委員会方式」で作られた本作でもその内容はそれが踏襲されている。新聞紙評では本作のそれも前向きに評価する意見が多いが、私はそれに反対！2人の男たちの会話もアホバカバラエティ調ではなく、もう少しホンモノを！きっと、井上ひさしも、『父と暮らせば』と同じように、もっと本質的な部分で「木の上の軍隊」なるものの問題提起をしたかったはずだと私は思うのだが・・・。

2025（令和7）年8月13日記